

この研究は「美術」概念と、それにかかわる分類のアップデートを目指しており、この結果「美術」の専門語としての位置を覆すような根本的な再編をも予期している。例えば、現在の日本では、しばしば「美術」に代わって「アート」が用いられているようだ。○美術品の分類はその収集とともに、古今東西において必要とされてきた。美術品の分類は、これまで——たとえば「絵画」の下位に「日本画」と「洋画」が配置されるような——体系性をもつものであり、美術史も、おおむね体系的分類にしたがって叙述された。しかし、今日のデジタル技術を用いた検索は、かつてのような分類の変化は、とうぜん分類観の変化を生みだし、アロー図式、セミラティクスのような新たな分類の在り方が注目されはじめている。○博物館学も美術史と同じく体系的分類を基礎としているが、新たに「美術」の名のもとにアヴァンギャルド、オルタナイトが次々に台頭することによって、従来の体系によつては「美術」の現状を捉えきれなくなっている。○こうした状況を踏まえて、このシンポジウムは、「美術」諸ジャンルの分類と、「美術」というジャンルを問題化し、今日的視点から、そのありべき姿をさぐることを、第一の目的としている。○「美術」は政治、経済の世界制覇に基づいて分類闘争でも勝利したのであつた。しかし、「地方固有の知」(C.ギアーツ)による分類が消滅したわけではなく、造型の現場に生きる者たちは両者の生み出しへモアレのなかで創作にいそしんでいた。植民地では、解放によつて国民国家形成が進められたので、この創造の桎梏は解放後に顕在化した。いわゆるポストコロニアル状況である。○「地方固有の知」は、例えは日本における「日本美術の特質」(矢代幸雄)といった発想から主張されたように、本質論的な固有性に由来するものではなく、東アジア文化圏の交流や海のシルクロードによるインド、アフリカそして西欧との交流のなかから形づくられたのである。しかしながら、他の地域でも同様であつたに違いない。異なる言語の間の交流は単に語の置き換えにとどまらず、文化自体の翻訳受容を必要とする。すなわち、語の背後にある語彙の構造もしくはそれを成り立たせる分類のスタイルの翻訳である。語彙という体系的(系統的)分類を成り立たせる概念と概念の関係づけの在り方の相互理解が必要なのだ。○コンピュータ利用は限りなく分類体系を相対化してしまつたが、検索が語を用いる限り、その背後の語彙と語彙を成り立たせる分類のスタイルを無視することはできない。このような観点に立つたとき、美術における分類はどのような変貌を遂げるであろうか。

日本は19世紀後半に西洋から美術を受容したが、概念やジャンル名をかりつて実態を変容させてきた。

これには日本に固有な歴史的背景に基づくのだが、美術史研究ではこの実態解明が進んでおり、本シンポジウムはこれらの成果やポストコロニアル状況以降の世界の実勢に照らして、その語彙や分類など包括的にアッパー・データーを再構築しようとするものである。

11月の福岡での成果を踏まえて、議論を深め、展開する。

「美術」概念の再構築 —翻訳と変容

アッパー・データー

このため、美術以前の造型意識の有りようを探り、アジア地域における美意識とその体系化を検証する。ここでは、それらをアジアでの美の原存在の検証や19世紀ヨーロッパにおける日本美術の「発見」とその認識がうんだものの検証によって、その具体相とそれが孕む課題を浮かび上がらせようとする。

これに基づけば、美術の近代が抱え込むことになる問題状況の大枠を確認することができるであろうし、さらには近代以降に「美術」が受容された地域において、展開させたことの基盤を捉える議論に発展させることもできる。それこそはグローバリゼーションにおける「美術」として、もつとも喫緊の課題とせねばならない。

日本における 「美術」概念の 再構築

アッパー・データー

—「美術」のオルタナティブをめぐつて
同時代美術の動向と美術館

近代以降に構築された「美術」に関する分類は、

美術それ 자체の在り方の変化によっても描きぶりをかけられている。

前世紀以来、従来の分類体系を以てては捉えきれない諸活動が、「美術」の名のもとに次々と出現して今日に至つているのだ。

アヴァンギャルド、あるいは美術のオルタネイトの台頭である。

同時代の、このような美術の有りようは、美術の分類を問題として浮き立たせるばかりではなく、

「美術」ないしは「芸術」という基本的な分類にまで描きぶりをかけずにはない。

これらの語に変えて「アート」という語が用いられることが多くなっているのも故なきことではないのである。

このセッションでは、こうした状況が「美術」の分類に如何なる影響を与えていたかを、作家とキュレーターの発言によってあぶりだすことを目指す。

作家とキュレーターの発言によってあぶりだすことを目指す。

アーティストの現場における分類闘争のライヴ・レポートである。

2014年12月6日(土)午前10時~午後5時30分
会場・金沢21世紀美術館シアター21
森 仁史 柳宗理記念デザイン研究所所長
並木誠士京都工芸大学教授
渡辺俊夫ロンドン芸術大学教授
山梨絵美子国際文化財機構東京文化財研究所企画情報部副部長
P.D.ブローレス(フィリピン大学ヴァルガス美術館館長)
稻賀繁美・国際日本文化研究センター教授
主催・科研共同研究「日本における『美術』概念の再構築」
共催・金沢美術工芸大学、金沢21世紀美術館
後援・美術史学会、明治美術学大云
問い合わせ先・金沢美術工芸大学事務局 tel.076-262-3653
<http://kanazawa-hbida.ac.jp>
<http://ustre.am/1ifp>

